

農と食のコラム

命の糧を感謝していただく

—農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄—

明治神宮で11月27日に開催された恒例の「いのちの感謝収穫祭—新嘗祭を祝う」に参加し、食と農の原点を垣間見る思いがした。

新嘗祭は宮中祭祀の三祭の一つであり、その中でも最重義の祭祀と位置付けられるが、新嘗祭そのものはすでに国家の三権の長と農林水産大臣が参列して、11月23日に行われている。

ちなみに三祭には、新嘗祭の他に祈年祭と神嘗祭がある。祈年祭は一年の五穀豊穡を祈るもので、2月17日に行われる。神嘗祭は収穫物を神様に供物として捧げるもので、10月17日に行われる。新嘗祭も収穫物を神様に供え収穫に感謝するもので神嘗祭と趣旨は共通するが、「新」は新穀を、「嘗」はご馳走を意味するように、「神を祀り、自らも食す」のが新嘗祭である。収穫に対する感謝とあわせて、食しながら収穫物をいただくことへの思いをあらたにする。

このように皇室の祭祀はコメをはじめとする五穀の豊穡に対する祈りと感謝を中心に執り行われており、天皇は国民を代表する司祭として、稲作神事を今日でも連綿として守り続けておられる。新嘗祭はあく

まで皇室の私的な行事として営まれるが、これは1945年12月のGHQによる「神道指令」によって国家行事から変更されたもので、祝日からも排除され、現在では勤労感謝の日となっていることは、ご承知の方も多からう。

「いのちの感謝収穫祭」に参加することであらためて新嘗祭の意義をかみしめる機会を得たが、その地域版である村々で行われる秋祭の昨今の状況は寂しい限りだ。若い衆の減少等により規模を縮小したり、やめてしまったりしたところも少なくない。すたれゆく秋祭の姿は農業・農村の現状を象徴する。

豊作を素直に喜ばなくなって久しい。豊作になれば需給は緩和して価格は低下するばかり。米価は昭和60（1985）年前後をピークに低下傾向を続けてきたが、今年空前の低米価を招いており、生産コストの引き下げ努力を重ねても、とうてい追いつき得ない水準を推移している。大規模農家ほどに低米価の打撃は大きく、“攻めの農業”の文字が白々しく映る。

そして何よりも豊作を感謝する心自体が希薄になりつつある。コメを天からの恵みではなく、自らの労働の産物であり、現金化するため



蔦谷 栄一（つたや えいいち）

〔主な経歴〕

東北大学経済学部卒業、1971年農林中央金庫入行、熊本支店長、農産部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長、常務取締役、特別理事などを経て、現在、農社会デザイン研究所代表

〔主な著書〕

「地域からの農業再興」「共生と提携のコミュニティ農業へ」（以上創森社）
「日本農業のグランドデザイン」（農山漁村文化協会）など

の商品としてだけ受け止めるようになってしまったところにも原因はある。消費者も“命の糧”であると理解する人は稀で、単なる食品にすぎず、安ければいい、輸入物でもかまわない、まして「ご飯1杯でオタマジャクシ35匹が守られる」（宇根豊氏）ことなど思いも及ばない。

あらためて新嘗祭の精神を現代に甦らせることが必要だと思う。魂が抜けた「住みよき美しい農山村の実現」は聞きたくもない。「人間中心だけではないさまざまな生き物のいのちを大切に作る稲作文明」をしっかり取り戻していくことこそが基本課題だ。

<表紙・目次へもどる>